「乙千代書状」（逸見家文書№９）

【書き下し】

廿八 註(注)進状、朔日到来、委披見、仍憲政(上杉)・景虎(長尾・上杉謙信)越国へ必
定帰候由承候、殊厩橋焼候哉、弥満足ニ可有之候、仍其地
普請、如形出来、又水筋可然由、肝要ニ候、各証人衆之事
舘沢(沓野町)尤ニ可有之候間、横地ニ申合、彼所ニ可置候条、可被存
其旨候、御嶽ニハ、人数籠候歟、一段気遣候、昌龍寺辺へ
打廻出候者、其擬可然候、然者、右衛門佐老母、昌龍寺へ被
闕落候
哉不審成様躰候、自此方不知様、先何方ニ成共、可被置候、
随而大鉄炮弓之義意得候、委三山可申、恐々謹言
追而高松衆、別而走廻候哉、祝着候、進退不続共、当秋迄
□□も可堪忍之由、可被申、
一廉可扶持候、

（永禄五）
四月二日　　乙千代（花押）

用土新左衛門尉殿